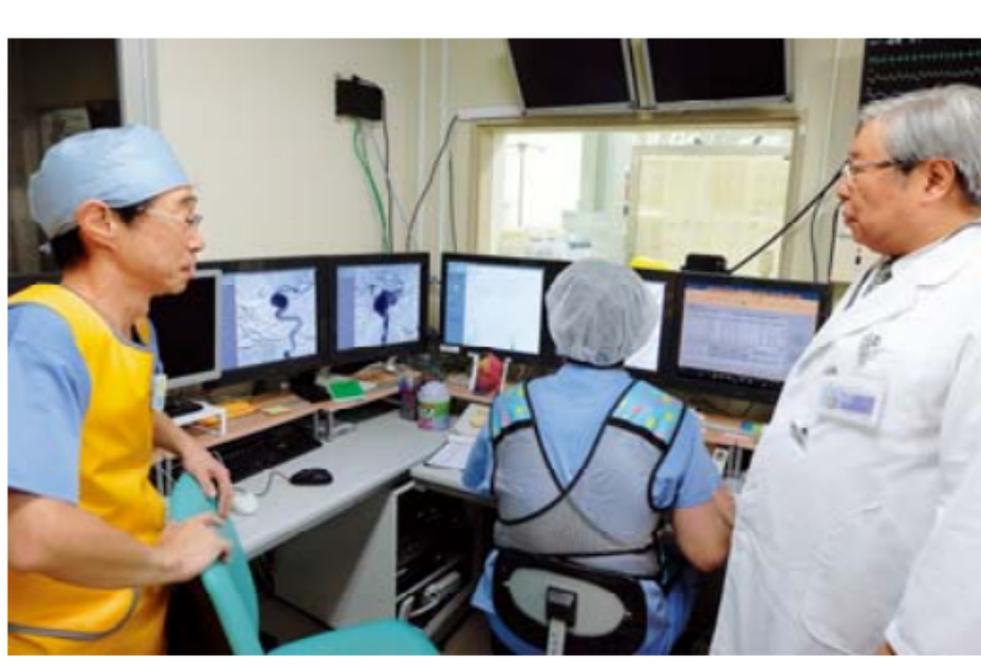


## 地域医療

### 仙台医療センターの脳卒中治療 24時間体制・迅速な処置

死亡率が高く、患者数も多いため都道府県が医療体制を充実させている病気の一つに「脳卒中」があります。国立病院機構（NHO）仙台医療センター（仙台市）は、40年前に救命救急センターを開設した際、「脳卒中センター」も設けました。全国に先がけたこの先進的な取り組みにより、以降、地域の脳卒中治療で大きな役割を果たしてきました。現在はその実績をベースに、地域連携や高度な脳卒中治療へのチャレンジを続けています。



治療を見守る上之原広司副院長（右）と江面正幸脳卒中センター長＝仙台市の仙台医療センター

仙台医療センターには、昼夜を問わず脳卒中を発症した患者さんが救急車で運び込まれます。治療エリアには医師の指示が響きわたり、緊急手術をすることもあります。脳神経外科部長も兼ねる上之原広司副院長は「脳梗塞や脳出血、くも膜下出血といった脳卒中は、1分1秒でも早く適切な処置をすることが大事です」と説きます。

#### SCUで高度な治療

仙台医療センターの脳卒中治療の特徴の一つは、救命救急センターが設置されていることにより、よりの確な治療が行えることです。SCU（脳卒中集中治療室）も完備され、24時間体制で病状に応じて救急科、脳神経外科、神経内科などの医師がスクラムを組んで治療にあたります。そしてもう一つが、カテーテルと呼ばれる極細の管を血管内に挿入し、脳動脈瘤や脳梗塞に対する高度な血管内治療に豊富な実績を持つことです。脳卒中センター長の江面正幸医師が中心となり、欧米から新たな治療技術を導入するとともに、独自の治療技術開発にも力を入れています。

2016年の脳卒中治療実績をみると、開頭手術が105件、血管内手術が247件、閉塞性脳血管障害（脳梗塞）治療が105件（うちステント留置手術＝金属でできた網目状の筒で狭くなった血管を広げる治療＝61件）。これは国内医療機関のなかでも五指に入る実績です。

## 新しい技術駆使

さらに、脳卒中から一人でも多くの命を救おうと新たな試みにも挑んでいます。その一つがドクターヘリと呼ばれるヘリコプターを利用した患者搬送です。昨秋からスタートした宮城県のドクターヘリ事業では、東北大学病院とともに仙台医療センターが基地病院として対応。脳梗塞患者を現地から直接、あるいは地域の病院からドクターヘリにより脳卒中治療の専門病院に搬送する治療体制の構築を急いでいます。発症後早期に搬送された症例では、血管内に詰まった血栓を血栓回収デバイスにより回収し、血流を再開させることが可能です。上之原副院長は、脳卒中治療では今後、この血栓回収治療が重要になってくるといいます。このため「当医療センターの救急システムを駆使し、脳梗塞急性期の血栓回収技術を少しでも多くの症例に適用できるように努めたい」と強調します。



運び込まれた患者さんに処置を施す医師ら

一方、脳卒中治療に関しても避けて通れないのは地域医療機関との連携です。リハビリ専門病院や地域の診療所など、各医療機関の専門性を生かし、役割を分担して適切な治療を継続することで、地域完結型の質の高い脳卒中医療を展開できるからです。この一環として、急性期から慢性期に移行する段階を指す「亜急性期」の患者さんを引き受けてもらえる病院との結びつきを強めました。患者さんが最初に運び込まれる病院として、より多くの患者さんの受け入れを目指したものです。

## 専門家を育成

このほか仙台医療センターがこれまで脳卒中治療・研究を通じて培った豊富なノウハウなどを他のNHO病院に伝えることにも力を入れています。NHOが開く「良質な医師を育てるための研修」で、同センターの治療技術を披露・指導し、専門医の育成に協力しているほか、若手医師育成プログラムに沿って他のNHO病院から留学の形で脳外科医を一定期間受け入れてもいます。優れた脳卒中治療技術が他のNHO病院にもスムーズに展開されるなど、NHOの強みがここでも発揮されています。